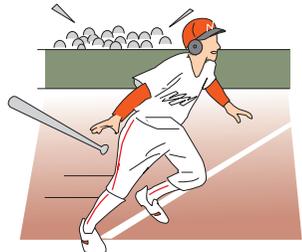


夢を追いつけて

—白井一幸—

「君の夢は、きつとかなうよ。」

講演会で、ステージ上から語りかける白井一幸さんは、笑顔にあふれ、力強い声をひびかせている。その言葉は、彼自身が、これまで歩み続けた道であり、たどり着いたゴールに他ならないからである。

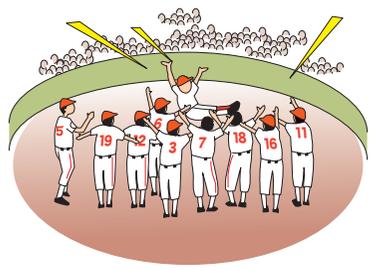


白井さんは、一九六一年香川県に生まれた。一九八三年のドラフトで日本ハム

ファイターズに入団。一九九一年には、自身最高の打率でリーグ三位、最高出塁率とカムバック賞を受賞している。一九九七年から日本ハムファイターズの球団職員となり、ニューヨークヤンキースへコーチ留学。二〇〇〇年に二軍総合コーチ、二〇〇一年に二軍監督を経て二〇〇三年からヘッドコーチとなった。

そして、二〇〇六年、北海道日本ハムファイターズは、日本一の栄冠を手にするのである。この喜びの中、選手たちの「やる気」を支え続けたヘッドコーチ白井さんは、自分の人生にとっても大きな実りを感じていた。

というのも、最初の年から、成果があがったわけではなかったのである。コーチたちからの不満や観客からの野次の中も、じっと我慢し、自分の進むべき道を信じ続けたのである。それが、二年目に二位、三年目、四年目連続優勝につなが



ることになる。ここに、どんなひみつがあったのだろう。彼が信じ続けたものは何だったのだろうか。

彼がまず取り組んだのは、選手の「やる気」を引き出すことだった。「やる気」さえ出れば、体はひとりで動くようにもなってくる。そのために、選手に「目標」と「夢」と「元気」を与えることから始めたのである。夢は、もちろん自分の成績をあげること、そして勝つこと、優勝することである。その目標に向かうためには、何をどうがんばりたいのか、練習方法や取り組み方を選手一人一人が考え、書いたり、語ったりしながら、明らかにしていったのである。

たとえ今は上手くないってない状態にあり、そればかりか、そこでどんなに努力してもいっこうに上向かない状態だったとしても、それを乗り越えたところに必ずや大きな喜びがあると信じて「夢」を抱き続けることで、今の苦しみを楽しみに変えられるという信念をもって、白井さんは「ぞんだと言う。そして、事実、選手たちは、笑顔で戦い、のびのびとプレーしていったのである。それこそ、勝ちたいという「夢」の力であり、その「夢」に向かって晴れ舞台で戦っているという「元気」であった。そこには、勝ちたいという共通の夢をもつファンの応援の力もあったことを忘れてはならない。

結果を信じて試合にのぞんでも、不安な気持ちは生まれる。白井さんも、選手時代、人一倍努力をするのに、本番に上手く結果を出すことができないことがよくあった。そんな白井さんだからこそ、選手の苦しみがよく分かる。白井さんは、選手時代に自分がかけてほしかった言葉を思い出しながら、

「おまえなら絶対できるぞ。自信をもっていけ。」

と選手たちをグラウンドに送り出すのである。そう声をかけられると、選手たちはみな、笑顔でバッターボックスに立つことになる。その笑顔は、任せてくださいという自信と責任感にあふれたものであった。

そして、練習では、緊張感に負けず、本来の力が発揮できるような心の持ち方についてのトレーニングも取り入れていく。ややもすると

（大じょうぶだろうか。うまく発揮できるだろうか。）

と体も固くなって、不安になりがちなところを、

（大じょうぶ。いよいよ発揮する 때가きた。）

とうまくやれそうな気持ちを高めていくのである。そのために、選手のプレーの結果に対しておこらないことを通したのである。コーチたちの我慢の中、選手は固くならずのびのびと一生懸命のプレーを見せるようになる。選手たちが、自分から「やれる」と思える自信をつけていったのである。それは、自分を信じ、コーチを信じ、仲間を信じ、互いの信頼関係を強くしていくことになったのである。

また、自信をつけるための指導は、一人一人の様子をよく見て行った。

アメリカ大リーグで活躍してきた、一流と言われる新庄剛選手も悩みを抱えていた。ある日、食事をしたとき、

「ぼくは、右うでが強すぎて、だからバッティングがだめなんですよ。」
と打ち明けてきた。

「実は、ずっと君の右うでのすばらしさを感じていたんだよ。その右うでの力を生かしていこうよ。」

と、いつも見ているかのように思っていたことを伝えた。と、それを聞いた新庄選手の目が、みるみる輝き出したのである。

「だまされたと思って、キャッチャーフライを打つぐらいのつもりで、大きくすくい上げるように、バットを振ってごらんよ。絶対打てるから。」

と白井さんは伝えた。それからというものの、彼は、周囲の人間がふしぎに感じるくらい徹底して、練習を始めたのである。それから、彼は見事なヒットを打ち続けることになる。

新庄選手の右うでが気になりながらも、彼が自分から来ることを待っていたら、心の準備ができた彼の方から近づいてきたのである。

これも新庄選手が、チームの勝利最優先の精神を徹底して貫き、ファイターズ日本一の「夢」を追い続けたからである。こうした白井さんの考え方は、チーム全体に行きわたり、自主性あるチームをつくっていったのである。



そこに、リーダーとしての人間的な力、心に訴えてくるような愛情を感じずにはいられない。

「ただ野球がうまくなるだけではない。夢をもって取り組み続けることの大切さを伝えていきたい。」

と語る白井さんの笑顔は、野球を始めたばかりの少年のころと変わらない、まぶしい輝きを放っていた。

白井一幸さんは、今もなお夢を追う少年たちやその指導者たちの力とやる気を引き出し続けている。

